明治30, 40年代の我が国における家族居室の南面配置を めぐる計画論上の試みについて

衛生面からみた住宅の平面計画に関する史的研究 その3

ON THE TRIALS IN THE IDEA OF PLANNING METHOD FOR ARRANGING THE DWELLING ROOMS FOR FAMILY USE TO FACE ON THE SOUTH IN JAPAN IN MEIJI 30'S AND 40'S PERIOD

Historical studies on the planning method of house from a viewpoint of hygiene Part 3

宮崎 信行*, 青木 正夫**

Nobuyuki MIYAZAKI and Masao AOKI

In this paper, we described some trials in the idea of planning method, that was shown us by many books in Japan in Meiji 30's and 40's period.

The point of the trials for arranging the dwelling rooms for family use to face on the south is presented as follows; the first trial was to arrange a japanese-style drawing room and so on to face on the north, and the second trial was to arrange subordinately a japanese-style drawing room, and both trials formed a new fundamental thought of planning.

Keywords: hygienic aspect, trials in the idea of planning method, dwelling rooms for family use, arranging to face on the south, fundamental thought of planning

衛生面、計画論上の試み、家族居室、南面配置、平面計画観

1. はじめに

明治30年代及び40年代の我が国においては、周知のように、欧米の住宅を模範として、あるいはこれに啓発されて、住宅を改良する様々な提案や議論が建築学の分野を中心に行われていた。また、我が国の衣食住を対象にして、その衛生面を研究する科学的な実験や調査も衛生学の分野を中心に本格的に行われていた。こうしたなかで、住宅の衛生面を改良する計画論上の試みは、家政教育を含む独自の分野で、明治20年代に引き続いて行われていた。その計画論上の試みの中で特に注目されるのは、家族居室を南面に配置するための新しい試みである¹⁾。

本稿は、その計画論上の新しい試みの内容を具体的に考察することによって、我が国住宅の家族居室を南面に配置することが、明治30年代及び40年代において一層具体的に追究されたことを明らかにしようとするものである。また、この追究のなかで、接客空間よりも家族生活空間を重視するという、いわゆる家族本位の平面計画観が形成されたことも明らかにしようとするものである。

家族居室を南面に配置することは、既稿²⁾で明らかにしたように、明治10年代から20年代の計画論上の試みで追究された、平面計画の主要な内容の1つであった。この平面計画の内容を主張するときには、特に中小規模の住宅を対象にした場合、接客空間の位置の問題が残されていた。これらの住宅では、南面する部分が限られており、家族居室をその南面に配置するならば、玄関を含む接客空間をどこに配置するかが問われたからである。つまり、家族居室を南面に配置するための接客空間の位置が問われていた。

明治20年代までの計画論上の試みはこの問題に答えないうままであり、明治30年代の計画論上の試みが答えることとなった。そして、この問題に答えることは、平面計画の内容を一層具体化するだけでなく、平面計画の基本的考え方をわち平面計画観を形成することともなった。我が国住宅の衛生面を改良する計画論上の試みは、こうして第3段階に入るのである。

ところで、この計画論上の新しい試みは、家政教育と

* 九州共立大学工学部建築学科 助手・工修

** 九州産業大学工学部建築学科 教授・工博

Research Assoc., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kyushu kyoritu Univ., M. Eng.
Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kyushu sangyo Univ., Dr. Eng.

は異なる分野で始まり、その影響を受けて、家政教育分野のみならず、一般向けの住宅建築分野あるいは家庭向けの衛生教育分野など、広い分野で行われている。しかも、この試みは、それぞれの分野でも一部の先進的な試みとして行われている。

そこで本稿では、家政教育分野に限定せず、明治30年代及び40年代の我が国において、家族居室を南面に配置するための接客空間の位置の問題に答えた文献、すなわち家族居室の南面配置をめぐる計画論上の試みを示す文献を広く取り上げて考察する。(表-1 参照)

2. 明治31年の横河提案

家族居室を南面に配置するための接客空間の位置の問題に対しては、住宅を2階建てにして、主な接客空間を2階に配置するという答えが可能であった。けれども、そのように答えた計画論上の試みは見当たらない。当時において住宅を2階建てにすることは、敷地が狭小で止むを得ない場合や、眺望を特に必要とする場合などと考えられていたからであろう³⁾。したがって、以下に考察する計画論上の試みは、平屋建ての住宅を対象にしていたことを最初に注意しておきたい。

その平屋建て住宅を対象にして、接客空間の位置の問題に最初に答えたのは⁴⁾、建築家であった横河民輔であろう。明治31年9月の新聞『時事新報』に掲載された「家屋改良談」という記事⁵⁾の中には、住宅の平面計画の参考として、横河民輔の提案が紹介されている。その内容は住宅の「客間」「居間」「台所」「下婢室」「湯殿」という5室について、それぞれ平面計画上の要点または留意点を述べたものである。この提案において、横河は上述の問題に具体的に答えている。

例えば、「客間」について次のように述べている。

「従来、家屋中第一等の好位地を占め、南向きの日当りよき所に置かれたるは、客を好遇するの意に出でたれば、極めて美事といふべきも、之が為め、肝心の家族を悪地に追込み、苦痛を与ふるの不都合あるに付き、今後は、客間を北側に移し、居間と入り替らしむべし。但し、来客ある節は十分に之を暖むること。」⁶⁾ (句読点は筆者、本書引用文は以下同じ)

すなわち、「居間」という家族居室を南面に配置するため、「客間」を北側に配置することを主張している。本文のいう「客間」は、後文を見るかぎり、床の間を設けた、いわゆる座敷である。本文の主張は、その座敷を北側に配置し、家族居室の位置と転換せよというものである。接客空間の位置の問題に対して、横河は具体的に答えている。

但し、本文の主張では、北側に配置する接客空間が座敷だけかどうかは必ずしも明らかでない。本文どおりに

表-1 家族居室の南面配置をめぐる計画論上の試みを示す明治30、40年代の主な文献

刊行年	書名	編著者名
明治31年	家事教科書	後閑菊野・佐方鎮子
32年	*家屋改良談	土屋元作
33年	普通家事教科書	錦織竹香
	*造家と築庭	竹貫直次
34年	*家事衛生	三宅秀
35年	*家屋改良建築法	井上繁次郎
	*家事教程	星常子・中島与志子
37年	新撰家事教科書	児嶋隆子
	大建築学	三橋四郎
38年	*台所重宝記	村井寛(弦斎)
39年	実践家政学講義	塚本はま子
40年	*日常生活衣食住	山方香峰
	家政要鑑	大日本家政学会
	*最新家事教科書	戸野みちえ
41年	*新編家庭衛生	石原喜久太郎
	*家作の菜	百束持中
	家屋と庭園	内山正如
	*実用家事教科書	甫守ふみ
	高等女学家事教科書	教育学術研究会
	家政学講話	嘉悦孝子
42年	*実用家庭百科全書	小栗要逸・他
44年	家庭日用婦女宝鑑	国分操子

注1：新聞・雑誌や平面図集等を除く。

2：*印は本稿で取り上げた文献を示す。

読めば、座敷だけのように理解される。しかし、座敷は接客空間の中心的存在であり、これを北側に配置するから、他の接客空間である玄関や応接間も当然北側に配置することが考えられる。つまり、接客空間全体を北側に配置することが考えられる(図-1 参照)。横河はこの提案では玄関や応接間について全く述べていないから、この点は不明である。本文の主張には、こういう不明瞭な点もあることを指摘しておきたい。

本文に続いて横河は、座敷を北側に配置したときの、正確には北面に配置したときの利点を強調している。

「客間を北向(き)にし、北の方に庭を作れば、樹木の表を見るの利あり。従来の如く南向きの座敷にては、客は常に樹木の裏を見るのみ。古き京都の寺院には往々北向の座敷あり。」⁷⁾ (〔 〕内は筆者、以下同じ)

こういう利点を強調したことや、挙げた実例が「古き京都の寺院」のみであることは、座敷を北面に配置することが実際には容易でないことを示唆している。

次に、家族居室である「居間」について、横河は次のように述べている。

「居間は、家族の常に居る所なれば、寒冷ならしめざる事極めて必要なり。之を南側に移せば、日当りよくして自から暖かく、火を焼きて暖むるとするも其費自から少なかるべく、健康上より云ふも余程宜しかるべし。」⁸⁾

すなわち、家族居室を南面に配置することを主張している。この主張は、家政教育分野の明治20年代の主張と比較すると、文章が短いせいもあるが、家族居室の中身が具体的でない。「居間」という家族居室は、「家族の常に居る所」というだけである。また、南面に配置する理由もやや異なる。「其費少なかるべく」という経済上の理由が中心であり、「健康」という衛生上の理由が補足的である。家族居室を南面に配置するという主張は、歴史的経過をみれば明らかのように、もともと衛生上の理由から提起されたものである。この歴史的視点から言えば、本文は、衛生面に基づく主張を経済面から強調したものである。

この横河の提案によれば、座敷(客間)を北面に配置する理由は、家族居室(居間)を南面に配置するためである。「客間」の項ではそのように主張しており、「居間」の項ではその主張を裏付けていた。ところが、「台所」の項を見ると、別の理由も見いだされる。すなわち、台所も南面に配置するためという理由である。

その台所について、横河は次のように述べている。

「現在の台所は最下等の位置に在り、且つ北向にして薄暗きが多し。其薄暗き処にて食物を調理するが故に、芥などの入りたるにも気付かず、明るき客間へ持出して思はず恥をかき、主人が小言の種となること毎なり。故に、之を南向の明るき所に移して、斯る不都合を避くると共に、十分太陽の光線を入れて、流し元を乾燥ならしめ、毒性の瓦斯、微菌などの発生を妨ぐこと肝要なるべし。」⁹⁾

「台所」の記述はこれだけであり、南面に配置することを主張している。この主張は、台所を東面または西面に配置できることを説いた明治20年代の主張と異なり、衛生面を中心とした明治10年代当初の主張と同じである。また、南面に配置する理由は、衛生上の理由が中心であるが、「思はず恥をかき」とか、「主人が小言」など、生活上の問題点を述べたことが新しい。

横河提案の以上の内容を要約すると、家族居室と台所を南面に配置するため、座敷を北面に配置せよという主張である。横河自身はそうに述べていないが、全体として述べている内容を要約すると、そういう主張である。この場合、座敷を北面に配置する理由は、家族居室と台所を南面に配置するためである。

ところで、座敷の北面配置を主張するかどうかは、後述するように、計画論上の試みの重要な論点である。この意味から、横河提案における座敷を北面に配置する理由をやや立ち入って考察しておきたい。

横河が全体として主張しているように、居間という家族居室と台所を南面に配置するならば、その結果として、座敷を北面に配置せざるを得ないであろう。より正確に言えば、接客空間全体を北面に配置せざるを得ないであ

ろう。この場合、これら諸室の平面計画上の相互関係を考察すれば、次のようであると考えられる。第1に、接客空間全体を座敷と座敷以外の接客空間とに区別すれば、北面に配置する順序は、室の性質上、座敷以外の接客空間が先であり、座敷が後であるという関係であろう。第2に、南面に配置する順序は、これも室の性質上、家族居室が先であり、台所が後であるという関係であろう。そうすると第3に、これら諸室全体の関係は、まず、家族居室を南面に配置するために、座敷以外の接客空間を北面に配置するという関係である。次に、台所を南面に配置するために、座敷を北面に配置するという関係である。こうした平面計画上の相互関係を考察するかぎり、座敷の位置と競合するのは、家族居室でなく、台所である。つまり、座敷を北面に配置する理由は、台所を南面に配置するためである。これは、横河自身が述べた理由とは異なっている。

したがって、横河提案における座敷を北面に配置する理由は2重に存在することが理解できる。1つは、横河自身が述べたように、家族居室を南面に配置するためである。他の1つは、家族居室とともに台所も南面に配置するためである。前者は居室部分の平面計画における理由として位置付けられ、後者は全体の平面計画における理由として位置付けられる。この後者の理由が解釈できる点に、横河提案の曖昧さが認められる。

以上のように、建築家・横河民輔は明治31年に、曖昧な点や不明瞭な点を残しながらも、接客空間の位置の問題に対しては具体的に答え、座敷を北面に配置することを初めて主張した。そして、この主張によって、接客空間よりも家族生活空間を重視するという、家族本位の平面計画観も実質的に提示した。こうして、家族居室の南

図-1 従来型の住宅平面例

注1：明治41年頃の建築学研究会編『日本家屋間取雑作集』第一集から抜粋。

2：玄関から脱帽、次ノ間、客之間(座敷)に至るまで接客空間全体を南側に配置した点は、この時期の諸文献で指摘された従来の住宅の特徴をよく示している。

面配置をめぐる計画論上の試みは新しい段階に到達したのである。

なお、横河提案が行われた背景としては、伝染病の流行や衛生行政の進展に対応して、衛生面から家庭生活を重視する傾向を指摘できるが、それだけでなく、明治20年代の家政教育分野にみられたように、生活面から家庭生活を重視する傾向も併せて指摘できるであろう¹⁰⁾。

3. 座敷の北面配置を基本とする計画論上の試み

3.1 明治30年代における座敷北面配置の主張

明治30年代における家族居室の南面配置をめぐる計画論上の試みをみると、明治31年の横河提案と同様に、座敷の北面配置を主張したものが散見される。これらの試みは、北面配置という座敷の計画内容は共通するものの、他室の計画内容が相違したり、主張の仕方が異なったりするものである。その座敷の計画内容を述べた文章や、これを述べるに至った経過などをよくみると、いずれも横河提案の影響が窺われる。家族居室の南面配置をめぐる計画論上の1つの試みは、この横河提案を継承することによって、座敷の北面配置を基本とする試みとして行われていた。

まず、横河提案をそのまま紹介して継承した例としては、明治32年の土屋元作者『家屋改良談』と、明治33年の竹貫直次編『造家と築庭』が挙げられる。前書は『時事新報』の記事を単行本としたものであり、記事同様に横河提案を紹介している。また後書は、平面計画を述べた部分で、『時事新報』または『家屋改良談』の文章を殆どそのまま引用して横河提案を紹介している。

次に、横河提案を内容面から継承した例としては、以下の3例が特徴的である。

第1の例は、明治32年12月の雑誌『太陽』に掲載された寒沢振作者『家屋の構造』である。著者は明治20年代からの家政教育家である。本書は、座敷の北面配置という主張を、いわば全体の平面計画において家族居室との関係で継承した点が特徴的である。例えば、平面計画について次のように述べている。

「間取[り]の適否も、大いに健康に関するを以て、最も注意をなさざるべからず、南向の室は、常に日光を受け、夏は涼しくして冬は暖なり、故に常住の室、即ち寝室、居間に宜し、又北向の室は、常に乾燥の風を受け、夏時と雖も炎熱を受くること少きが故に、常住せざる室即ち客間[座敷]、又は食物を貯ふる庖厨に最も妙なり、此心得を以て、間取をなすときは、十分健康を保全することを得るなり」¹¹⁾。

この主張は、横河提案と比較すると、台所(庖厨)を北面に配置する点が異なっている。また、座敷を北面に配置することは全体の平面計画において主張され、このこ

とが明瞭である点も異なっている。本書の場合、座敷を北面に配置する理由は、家族居室のほぼ全部を南面に配置するためである。

ところで、本書は、明治32年3月から連載が開始され、その第1回目で既に平面計画の問題を取り上げていた。しかし、このときには、座敷を北面に配置することを主張していなかった。例えば、「間取に関せる理由は頗る簡単にして、常に住める室は之を家屋の南或は南東の部に取るを要すと云ふに過ぎず」¹²⁾と述べながらも、座敷については、南面に配置することを述べていた。

「客室[座敷]は東南に向ふを以て第一とす、しかりと雖も、これを南に向はしむるも可なり、即ち冬日は温暖にして、夏日は南北の涼風を入るればなり。」¹³⁾

つまり、明治32年3月の時点では、座敷の南面配置を主張していたが、同年12月の時点では、既にみたように、座敷の北面配置を主張している。土屋元作者『家屋改良談』は同年3月に刊行されたから、横河提案の影響を受けたことが推測される。

特徴的な第2の例は、明治35年の井上繁次郎著『家屋改良建築法』である。著者は建築の職人である。本書は、座敷の北面配置という主張を、居室部分の平面計画において家族居室との関係で継承した点が特徴的である。例えば、この主張を「近來行わるる説」として次のように述べている。

「客間は来客を請じ応接し、饗宴等のために用ふる一家の表座敷なり、故に家屋中最も尊重なる構造を要し、且つ庭園に望たる好位置に置くを以て我国の慣例とす、然るに近來行わるる説は不時の来客を待[つ]客間のために一家中の最も好位置を塞ぎ、日常起居する家族等の居間は、好位置を得ざることあり、故に客間は北側に移し、来客に対する相当の設備をなせば、大に便利ありとす」¹⁴⁾。

座敷を北面に配置したときの利点こそ説いていないものの、主張の内容及び主張の仕方は横河提案とほぼ同じである。本文のいう「近來行わるる説」が横河提案であることは間違いないであろう。

また本書は、家族居室すなわち「家族等の居間」については次のように述べている。

「居間書斎隠居部屋小児室の如き、日常起居に充つる間室は家屋中庭園に望める好位置に置くを可とす、就中隠居部屋[マ]小児室の如きは、日当りよき且つ衛生上好適の位置を選むべし」¹⁵⁾。

老人や子供の居室を優先して南面に配置することは、横河提案では主張されなかったが、既に明治29年の『家事経済』¹⁶⁾で主張されていた。

さらに台所については、本書はその位置を明確に主張していない。前書のような北面配置には反対しているが、横河提案のような南面配置を主張していない。むしろ、

南面配置にも反対しているようである。

「台所は食物を調理する処なれば、相当の広さと清潔なる構造を要す、其位置北面にあらば各季〔マ〕寒冷なり、又西面にあらば夏日日光の直射烈しく且つ食物の煮焼する火気と混じ、炎熱堪難きのみならず、貯蔵する食物の腐敗を速かならしむる恐れあり」¹⁷⁾。

台所の記述はこれだけである。本文が指摘する「西面にあらば」以下の問題点は、南面に配置した場合もほぼ当てはまるであろう。

本書は、横河提案との関係でみれば、台所の南面配置には否定的であるが、座敷の北面配置にはむしろ肯定的である。この点から、横河提案を継承して座敷の北面配置を主張したものと位置付けられる。

特徴的な第3の例は、明治38年の村井寛著『台所重宝記』である。著者は小説家であり、また食生活の研究家でもある。本書は、座敷の北面配置という主張を、全体の平面計画において台所との関係で継承した点が特徴的である。例えば、問答形式で次のように述べている。

「下女『奥様、台所は何処の家でも狭くって暗くって湿気て居る様ですがあれはあんまりよく御座いませんね』

妻君『そうですよ、人の建てた家に居る人は仕方が無いが自分で家を建てる人はよく台所に注意しなければなりませんね、客座敷なんぞは家の人が年中使ふ場所が無いから北向きに据えるが宜し、台所は家の人の健康の基だから南向きの乾燥した場所に造らなければいけません』¹⁸⁾。

換言すれば、家族居室を南面に配置することは当然として、そのうえ台所も南面に配置するためには、座敷を北面に配置することが必要なのである。この場合、座敷を北面に配置する理由は、全体の平面計画において、台所を南面に配置するためである。本書は、前書『家屋改良建築法』を参考にした形跡もみられるが、台所の南面配置を座敷の北面配置と対比して主張した点では、横河提案を直接参考にしたものと推測される。

なお本書は、前書や前々書が示唆した台所の南面配置の問題点、すなわち食物が腐敗しやすく貯蔵しにくいという問題点については、台所内の北側部分で処理することを後文で述べている。

このように、家族居室の南面配置をめぐる計画論上の1つの試みは、明治30年代においては、横河提案を継承することによって、座敷の北面配置を基本とする試みとして行われていたのである。

3.2 明治40年代における座敷北面配置の主張

座敷の北面配置を基本とする明治40年代の計画論上の試みをみると、座敷の北面配置という平面計画の内容を主張するだけでなく、平面計画の基本的考え方すなわち

平面計画観をも問題にしつつあったことが注目される。そのような例のみを挙げると、以下のようである。

第1の例は、明治40年の山方香峰(家政教育家)著『日常生活衣食住』である。「家屋の建築」と題する1節では、座敷について次のように述べている。

「客間(座敷)は庭園に向ふやうに建つべし、其方位は、北向を可とする説あり、これ居間を冬暖夏涼の南向となし、不時の来客を迎ふる客間は、北方にて足れりとなす家庭中心説なり、尤もかくすれば、庭園の樹木の表を見るを得べく、且冬時は相当の設備さへならば、北側にても足ることなり」¹⁹⁾。

座敷の北面配置を家族居室(居間)との関係のみで述べたことは明治35年の『家屋改良建築法』と似ているが、庭園との関係を述べたことは横河提案と似ており、おそらく本書は横河提案を参考にしたであろう。その横河提案の座敷北面配置の主張を肯定的に紹介している。

そして本書は、座敷北面配置の主張を紹介するだけでなく、その主張を「家庭中心説」と呼んでいる。この呼称は、横河提案における家族本位の平面計画観を端的に表現しており、平面計画観を問題にしたものと位置付けられる。

第2の例は、明治45年6月の雑誌『婦人画報』に掲載された横手千代之助(医学博士)著『最も快い住居と夜具蒲団』である。「お客様本位ならいざ知らず」と題する1節では、次のように述べている。

「衛生上から申せば、家人の一番多く使ふ室(ハ)は、南向の日当りの好い処にして、客座敷の如き、始終使はない室は北側にした方が宜いのであります。客座敷を北向の処に設けては、御客様に対して失礼だといふ人があるかも知れませぬが、其代り装飾でも立派にすれば、さう失礼になることもありますまい。従来の住居は多くは客座敷ばかり南向の好い処に設らへ、家族の居間は北向の光線の入らぬ陰気な処に設けてあるやうですが、これは衛生の何物たるを解せぬ仕方、言はばお客様本位の住居で、家族はどうでも可いという流儀であります。」²⁰⁾

家族居室を北面に配置した従来の住宅を「衛生の何物たるを解せぬ仕方」と非難したうえで、これを「お客様本位」と呼び、「家族はどうでも可いという流儀」と述べたことは、いわゆる接客本位の平面計画観を批判したものと理解できる。

このように、座敷の北面配置を基本とする計画論上の試みは、明治40年代においては、座敷の計画内容を主張するだけでなく、従来の接客本位の平面計画観を批判したり、新しい家族本位の平面計画観を明示したりなど、平面計画観そのものをも問題にしつつあった。それらはごく一部の先進的な試みに過ぎなかったが、ともかくそうした試みが存在したのである。

したがって、明治30、40年代における家族居室の南面配置をめぐる計画論上の1つの試みは、座敷の南面配置を否定して北面配置を基本とする試みとして、平面計画観をも問題にする方向で行われていたのである。

4. 座敷の位置を最優先しない計画論上の試み

家族居室を南面に配置するための接客空間の位置の問題に対しては、座敷を北面に配置する主張とは別に、異なる主張も存在していた。例えば、座敷の位置または座敷の南面配置を最優先しないという主張、あるいは家族居室の南面配置を最優先するという主張である。これらの主張は、接客空間をどこに配置するかという点では、具体的または直接的に答えたものではないが、それぞれ計画論上の新しい試みである。そして、それらは、座敷の位置を最優先しない試みとして位置付けられる。したがって、家族居室の南面配置をめぐる計画論上のもう1つの試みは、座敷の北面配置を直接に主張しない試みとして、すなわち座敷の位置を最優先しない試みとして行われていた。

4.1 座敷の位置を最優先しない主張

座敷を北面に配置することが容易でないことは、明治31年の横河提案で既に示唆され、明治35年の『家屋改良建築法』や明治40年の『日常生活衣食住』がその主張を紹介する形を取ったことにも示唆されていた。そのことはまた、明治37年の斎藤兵次郎(建築職人)著『日本家屋構造』の次の批判からも窺われる。

「客間は、賓客を此に誘ひ、談話応接し、或は饗宴等に使用する一種の表座敷とする、家屋中尤も肝要なる室なれば、空気の流通を能くし、方位を選び、辺景を利用し、内部に装飾を施し、前面に庭園を設くるを常とす。其方位は、南面するを良しと云ひ、或は、南面すれば客をして植物の裏を觀せしむるものなれば、北面するを可とするの説あれども、本邦の如き來訪時間の定まり無き所にありては、客間の北面するは、陰氣満ち、來客をして不愉快の感有らしむる、蓋し多かるべし。」²¹⁾ (句読点は筆者)

この北面配置に対する批判は、従来の接客本位の平面計画観に基づくようであるが、直接には「本邦の如き來訪時間の定まり無き所」という接客の実態に基づいている。この批判によって、当時の接客実態の一端が窺われると同時に、座敷を北面に配置することが容易でないことも窺われる。そして、座敷の位置は生活面からも考慮すべき重要な問題であったことも理解できるであろう。

この生活面との関係でみると、座敷の北面配置という主張は、生活面よりも衛生面を重視する立場であり、衛生面を中心とする立場であった。だから、その計画論上

の立場が異なれば、従来の接客本位の立場を論外としても、この主張には同意しがたかったと考えられる。例えば、衛生面と生活面の両方を重視する立場である。この立場は、詳しくみれば、衛生面を重視しつつ生活面も重視する立場と、生活面を重視しつつ衛生面も重視する立場とが区別できる。

これらの立場の人々にとっては、この主張に同意しがただけでなく、座敷の位置を具体的に提示することも困難だったと考えられる。なぜなら、衛生面を重視するかぎり、座敷の北面配置を単純に否定できないだろうし、座敷の南面配置も単純に肯定できないだろうからである。その結果、座敷の位置を具体的に提示しない様々の主張が生まれたと推察される。

例えば、明治34年の三宅秀(医学博士)著『家事衛生』は、家族居室の南面配置を主張しているが、座敷の位置を具体的に提示していない。居室部分の平面計画について次のように述べている。

「居室を配当するには、老人・小児の室を主として通気・採光共によき所を選び、次に壮健者の室を定むべし。殊に注意すべきは寢室なり。是れ夜間は多く閉鎖するの習慣なるを以て、通気には一層の注意を要し、日中には力めて日光を通じ、空気の流通をよくなし置くべし。その他書斎・客室(すなわち座敷)等格別に重きを置くの必要を見ず。」²²⁾

座敷についての記述は本文以外では見当たらず、座敷の日照・通風には「格別に重きを置く」かない、つまりその位置には「格別に重きを置く」かないというだけである。これは座敷の位置を最優先しない主張である。この主張は逆に、「老人・小児の室」または「寢室」など家族居室の位置(南面配置)を最優先することを意味している。

これと同じような主張は、明治40年代にもみられる。明治41年の石原喜久太郎(医学士)著『新編家庭衛生』である。本書は、従来の平面計画を横河提案と同様に批判するにもかかわらず、座敷の北面配置を主張せず、その位置を具体的に提示していない。

「間取りは、居間は南受けの光線の射入よき處を占むべし、老人子供の室など殊に然り、長く居るべき室だけ、可成光線の射入と空気の流通よき室を選ぶべし、住居広く、室数多き場合には、よき室の一を用ふるも可なれども、室数少き場合に、客間を第一等のよき室に当てるは好ましからぬ事なり、固より、客に対する礼を重んずるはよけれども家族の健康を害してまでも、強て悪室を居間となすの必要なければなり」²³⁾。

座敷は「第一等のよき室に当て」ないというだけであり、その位置を最優先しないというだけである。この主張は、前書と同様に、家族居室の位置(南面配置)を最優先することを意味している。

これら2例は、座敷の位置を具体的に提示しなくても、

その位置を最優先しないことを主張すれば、接客空間の位置の問題に対しては、1つの答えとなりうることを示している。そして、その主張は明らかに接客本位の平面計画観を否定し、家族本位の平面計画観を形成している。したがって、これら2例は計画論上の新しい試みであり、座敷の位置を最優先しない試みである。

ところで、これら2例の主張は、その内容を考察すると、座敷の位置を最優先しないだけであるから、最優先しないかぎり、座敷の位置をどこでも随意とするものである。座敷を北面に配置することも可能であれば、もし必要ならば南面に配置することも可能である。前述した座敷の北面配置を基本とする試みと比較すると、座敷の南面配置を必ずしも否定せず、これを許容する点が大きく異なっている。

また、これら2例の主張は、計画論上の立場が衛生面を重視しつつ生活面も重視する立場であり、この立場や主張の内容等を考えれば、座敷の北面配置を基本とする試みに反対したものであり、その試みから進展したものであると位置付けられる。

4.2 座敷の南面配置を最優先しない主張

従来の平面計画の考え方から進展した主張のごく一部には、座敷を重視しながらも、その位置またはその南面配置を最優先しないという主張が存在した。この主張もまた、座敷の位置を最優先しない試みであった。けれども、上述のような座敷の南面配置を許容するものでなく、座敷の南面配置を基本とするものであった。

例えば、明治35年の星常子・中島与志子共著『家事教程』である。本書は、題名から察せられるように、家政教科書である。まず、従来の平面計画の考え方から、座敷の南面配置を次のように主張している。

「坐敷は、諸室中主要のものにして、招待せし賓客、もしくは遠来の客、身分の貴き人等を延請する正寝なれば、空気の流通日光の射入に注意すべきは勿論にして、夏は冷しく冬は暖なる位置を選ぶべく、庭園と共によく掃除して清潔ならしめざるべからず。」²⁴⁾

すなわち、「日光の射入」、「夏は涼しく冬は暖なる位置」と述べているように、直接的な表現ではないが、南面配置を主張している。しかし本書は、その南面配置を最優先しないことを次のように主張している。

「応接の間と、坐敷とは、玄関に近かるべし。日あたり風通し共によきに若かすとも、止を得されば少々不十分なるを忍び得べし。何となれば、賓客の歓待は一時のものなれば、そのために特に暖を取り涼を送る等の手段なきにあらざればなり。」²⁵⁾

すなわち本書は、座敷を重視し、座敷の南面配置を重視しながらも、その南面配置を最優先しないことを主張している。この主張は、座敷の南面配置を最優先しない

主張であるが、その内容を考察すると、座敷の南面配置を基本として、座敷の位置を最優先しない主張である。

本書が述べているように、座敷の南面配置を重視し、止むを得ない場合に「少々不十分なる」位置を考慮することは、南面配置を基本とすることである。この南面配置が基本であれば、南面に配置する家族居室数が少ない場合、座敷を南面に配置するであろう。そして、座敷を南面に配置するものの、その位置を家族居室の南面位置より低位におくであろう。これは、座敷の南面配置を基本として、座敷の位置を最優先しないことである。

従来の平面計画の考え方は、これまでの引用文からも窺えるように、座敷の南面配置を基本とするだけでなく、座敷の位置を最優先していた。本書は、座敷の南面配置を基本とするが、座敷の位置を最優先しない。つまり、接客本位の平面計画観を否定し、家族本位の平面計画観を形成しているのである。なお本書は、家族居室については次のように述べている。

①「居室は、日常家人の居る所なれば、最も衛生に注意せざるべからず。」²⁶⁾

図-2 明治39年の家政教科書掲載平面図

注1：星常子・中島与志子共著『再訂・家事教程』から、掲載3例のうち最初の2例を示す。（東書文庫所蔵）

2：図の上方は南側であり、主婦の居室（主婦ノ間）を南面に配置した点が注目される。同時に、座敷（客間）を依然として東南面に配置した点も注目される。この平面図にみる平面計画の内容は、本書の計画論上の試みの内容と必ずしも一致していない。

②「隠居の部屋は、間取をなすにあたりて、まづ定めざるべからず。何となれば、老人は最も衛生の十分ならんことを要し、又外出すること少なければ、最もその居室を快からしむるを要し、…」²⁷⁾。

すなわち、家族居室については「最も衛生に注意」すべきことを主張し、老人の居室(部屋)に関しては「最も衛生の十分ならんこと」を主張している。これらは、南面配置を主張していると見なしうる。

次に、明治40年代の例としては、同じく家政教科書であり、明治41年の甫守ふみ著『実用家事教科書』が挙げられる。本書は、座敷の位置を最優先しないことを次のように主張している。

「客室は、庭園を前に設けて、家中のよき室を選び、床の間を設け、その他相応の装飾を施すべし。但し室の方向〔向き〕などは、居間の如く大切ならず。成るべく子供の居間・台所等に遠きをよしとす。」²⁸⁾

座敷を全体として重視しているが、その位置については「居間の如く大切ならず」と述べている。この1文によって、座敷の位置を最優先しないことだけでなく、家族居室の位置を最優先することも主張している。

本書の主張は、前書のそれと比較すると、座敷の南面配置を特に述べていない点が異なるが、座敷を重視している点が共通する。この後者の点から、前書と同様に、座敷の南面配置を基本とするものと位置付けられる。

このように、座敷を重視しながら、その位置またはその南面配置を最優先しない主張は、座敷の南面配置を基本として、座敷の位置を最優先しない試みであった。この主張は、計画論上の立場が生活面を重視しつつ衛生面も重視する立場であり、また座敷の南面配置を基本とする点で、客観的には、座敷の北面配置を基本とする試みに強く反対するものだったのである。

4.3 家族居室の南面配置を最優先する主張

従来の平面計画の考え方から進展した主張は、上記の例を除いて、一般には、座敷の位置を提示しない例が多い。というよりむしろ、座敷の南面配置を明示しない例が多い。これは、座敷の位置をどう提示するかに混迷した状況、あるいは座敷の南面配置を明示することを躊躇する傾向をよく示していた。

その南面配置を明示せず、その位置も提示せず、座敷の位置を不明瞭にしたまま、家族居室の南面配置を最優先するという主張が存在した。この主張は、座敷の位置が不明瞭であるにもかかわらず、座敷の位置を最優先しない試みであった。なぜなら、家族居室の南面配置を最優先すること、すなわち家族居室の位置を最優先することは、座敷の位置を最優先しないことと相関したからである。この例としては、南面配置を最優先する家族居室の中身が異なる点で、以下の3例が特徴的である。

第1の例は、明治40年の戸野みちえ著『最新家事教科書』である。本書は、老人や子供の居室を最優先することを主張している。まず座敷については、他室や庭との位置関係のみを次のように述べている。

「客室は、玄関より応接所、又は他の室を通らずして、出入し得る様、配置すべし。又台所、小児の室に近からず、庭園を前に控へ、次の室と明け放しに用ひ得べき様すべし。」²⁹⁾

このうち「庭園を前に控へ」ることは、座敷を北面に配置する場合と、南面に配置する場合があるから、座敷の位置を提示したことにならないであろう。けれども、前後の文章を見れば、「台所、小児の室に近からず」とか、「次の室と明け放しに用ひ得べき」など、本文は従来の平面計画を述べている。この従来の平面計画との関係でみれば、「庭園を前に控へ」ることは、座敷を南面に配置することと理解できる。

本書は、このように座敷の位置を提示せず、座敷の南面配置を明示していないが、家族居室の南面配置については次のように述べている。

「居室は、孰れも家族が日常住居すべき処なれば、最衛生に適するを要す。

イ、老人の室は、暖かにして空気の流通よく、静かなる処にて、庭園を控へたるをよしとす。

ロ、家長の室は、〔省略〕

ハ、小児の室は、暖かにして空気の流通よく、主婦又は老人の室に近く配置すべし。中等程度の教育を受ける程とならば、成るべく静かなる室を与ふべし。

ニ、主婦の室は、〔以下省略〕」³⁰⁾

居室が「最衛生に適する」ことは「暖かにして」という南面配置を含むから、本文は老人や子供の居室の南面配置を最優先することを主張している。この主張は逆に、座敷の位置を最優先しないことを示しているであろう。

特徴的な第2の例は、明治42年の小栗要逸ら編『実用家庭百科全書』である。本書は、寝室の南面配置を最優先することを主張している。例えば、寝室の位置について次のように述べている。

「寝室の場所は、なるべく奥まりたる所にして、其構造は殊に湿気の昇ること少なからんやうにすべく、且つ最も光線、空気の、充分に注入する静かな場所を選ばなければならぬ。八畳か六畳敷の南に向ひたる位置が尤もよろしい」³¹⁾。

すなわち、「最も光線、空気の、充分に注入する」場所を選ぶというように、寝室の南面配置を最優先することを主張し、その位置も明確に述べている。ところが、本書は座敷の位置を述べていない。座敷については「客室及び居室」の項で簡単に述べているだけである。

「客室はなるべく広くして、其構造、建具、及び室内装飾の調度も、身分に相応してこれをつくるべきであ

る。居室は、銘々便宜の所を選びて定むべく殊に主婦の居る所は一家の管理上適当なる場所を選ぶべきである。然らざれば家人の挙止動作に注意すべき点に於て大に不便を感じ、且つ経済上にも知らず知らず失費の立つことあるものである。然れども、衛生上また、其の光線、空気等の流通にも、能く心を用ひて、常住の間(あひだ)は、家人の監督を忽せにしてはならぬ。」³²⁾

家族居室、とりわけ主婦の居室については、位置を問題にし、「光線、空気等の流通」など位置を示す内容も述べているが、座敷については、それらを全く述べていない。そして、「身分に相応してこれをつくる」とか、主婦は「家人の挙止動作に注意すべき」など、従来の平面計画の考え方を述べている。この考え方をみれば、座敷の位置は南面であることが理解できるが、そのことを明示していない。本書の場合も、前書と同様に、座敷の位置を最優先しないことと理解できるであろう。なお、本書は老人や子供の居室については特に述べていない。

特徴的な第3の例は、明治41年の百束持中著『家作の栞』である。本書は、茶の間の南面配置を最優先することを主張している。例えば、茶の間について次のように述べている。

「〔茶の間の〕装飾は〔主人の〕居間客間よりも粗略になして可なれども。主婦は多くここに住み。家人も常にここに集まる室なれば。心目を娛ましむるだけの装飾を施すを要す。空気の流通、日光の透通は最も宜きやうに造るべし。故に各室の間取をなすに臨み。最も注意を加へ、意匠を凝さざるを得ず。」³³⁾

すなわち、「日光の透通は最も宜きやうに造る」というように、茶の間の南面配置を最優先することを主張している。ところが、本書もやはり座敷の位置を述べていない。座敷については、名称の由来から説き起こし、その設備や床の間の形態を詳しく述べているだけである。

「吾人の正殿とも称すべき客間は、普通座敷と称し。昔は床上に畳を敷き詰めず。主客の座を設くる場合に。今の座布団を用ふる如く、その座す所のみ畳を敷きたるより、その名称は起りしなり。故に今の大広間を昔は大床(おほこ)と称へたり。あるいは書院と称ふるは。仏寺にて仏書を講ずる所を少しく突き出し。明障子を用いて読書に便ならしめたるを。通常の住宅もこの式に倣ふて、客間を設け、書院と称せしに由る。…通常の住居に於ては床の間のみを設け。棚を略して押入を設くることあり。また置床と称へて下に床板のみを置き。釣床と称へて上に床柱の形のみを示すあり。その構造に斯くの如く精粗の別あるも。要するに床の間は和様住宅の主脳とも云ふべきものなれば。次手にそのことを少しく説かん。…」³⁴⁾

こうして結局、本書は座敷の位置を述べていない。けれども、本書が従来の座敷のあり方を述べていることを

考えれば、座敷を南面に配置することと理解できる。もちろん、既にみたように、茶の間の南面配置を最優先するから、座敷の位置を最優先することではないと理解できるであろう。

このように、座敷の位置を不明瞭にしたまま、家族居室の南面配置を最優先するという主張は、座敷の位置を最優先しない試みであった。また、この主張は、明瞭さに欠けるが、結果的に接客本位の平面計画観を否定し、家族本位の平面計画観を形成していた。そして、まだ十分に明瞭ではないが、この主張は座敷の南面配置を基本とするものと位置付けられる。

したがって、明治30、40年代における家族居室の南面配置をめぐる計画論上のもう1つの試みは、座敷の位置を最優先しない試みとして、一方では座敷の北面配置を基本とする試みから進展し、座敷の南面配置を許容する内容で行われ、他方では従来の平面計画の考え方から進展し、座敷の南面配置を基本とする内容で行われていた。これらは、家族本位の平面計画観を形成しつつ、客観的には、座敷の北面配置を基本とする試みに反対する形で行われていたのである。

なお、従来の平面計画の考え方から進展した主張の中には、座敷の位置を不明瞭にしたまま、家族居室を南面に配置するという主張も存在した。この主張は、接客空間の位置の問題に対して消極的な形で答えているが、家族本位の平面計画観を形成するには至っていない。この主張については、指摘するだけにとどめたい。

また、接客空間の位置の問題に関しては、横河提案を考察したときに述べたように、家族居室と座敷以外の接客空間との相互関係が存在していた。この関係に注目すれば、座敷以外の接客空間すなわち玄関や応接間などを北面または南面以外に配置するという主張があり得た。この主張は、家族居室を南面に配置するための最も現実的な主張であったと考えられるが(図-2参照)、実際には見当たらなかった。接客空間の位置の問題に対しては、家族居室と座敷との関係で答える場合が殆んどであり、このことはこの時期の計画論上の試みの特殊性を示しているであろう。

5. まとめ

以上、明治30年代及び40年代の我が国における住宅の衛生面を改良する計画論上の試みの中から、家族居室の南面配置をめぐる計画論上の試みを取り上げ、その具体的内容を平面計画に視点をあてて分析し考察してきた。これらをまとめると、以下のようである。

①建築家・横河民輔は明治31年に、家族居室を南面に配置するため、座敷を北面に配置するという平面計画の内容を初めて提案した。また、これによって、接客空間よ

りも家族生活空間を重視するという、いわゆる家族本位の平面計画観も実質的に提示した。

②その後、横河提案を継承することによって、座敷の北面配置を基本とする計画論上の試みが多様に行われていた。この試みは、台所等の計画内容が一部で相違し、北面配置という座敷の計画内容が共通するものであった。また、この試みは、座敷の計画内容の性格上、家族本位の平面計画観を明瞭に形成していた。したがって、家族居室の南面配置をめぐる計画論上の1つの試みは、座敷の北面配置を基本とする、歴史的には急進的な試みとして行われていた。そして、平面計画観をも問題にする方向で行われていた。

③他方、この計画論上の試みに反対する形で、座敷の位置を最優先しない計画論上の試みも多様に行われていた。この試みは、上述の試みから進展したものと、従来の平面計画の考え方から進展したものとが区別された。前者は座敷の南面配置を許容する点に特徴があり、後者は座敷の南面配置を基本とする点に特徴があった。そして、それらは、それぞれ家族本位の平面計画観を形成していた。したがって、家族居室の南面配置をめぐる計画論上のもう1つの試みは、座敷の位置を最優先しない、歴史的には漸進的な試みとして行われていた。

④このように、我が国住宅の家族居室を南面に配置することは、明治30年代及び40年代の計画論上の試みによって一層具体的に追究され、この追究のなかで、家族本位の平面計画観も形成されたのである。

参考文献

- 宮崎信行・青木正夫：明治10年代の我が国住宅の衛生面を改良する計画論上の試み－衛生面からみた住宅の平面計画に関する史的研究所の1－、日本建築学会計画系論文集、第458号、1994年4月
- 宮崎信行・青木正夫：明治20年代の我が国の家政教育分野における住宅の衛生面を改良する計画論上の試みについて－衛生面からみた住宅の平面計画に関する史的研究所の2－、日本建築学会計画系論文集、第467号、1995年1月

注及び引用文献

- 1) その他の計画論上の試みとしては、正座による足の発育障害の問題、床面に近い就寝状態の非衛生さの問題などを指摘して、ベッドの使用や椅子の使用など、衛生面から椅子式生活を主張したものが注目される。
- 2) 参考文献 1)、2) を指す。
- 3) 例えば、明治35(1902)年の井上繁次郎著『家屋改良建築法』はそのような考えを述べており、同年の星常子・中島与志子共著『家事教程』は敷地が狭小で止むを得ない場合という考えを述べている。

- 4) 当時の軍医であった森林太郎も明治23(1890)年の『屋式略説』で以下のように述べているが、家族居室や接客空間のあり方は抽象的である。なお、本書は西洋文献を翻訳したものと推測される。

「居人の屋式(平面計画)上の錯誤をなすも間々これあり。其源は虚飾にて人を眩せんとする俗情より起る。最美、最明、最潤の室は、是れに於てや待客の処となり、暗き片隅は居室となり、臥房となる。何ぞ知らん。人家の最善美なるべきは居室と臥房と児房とにして、其他は余裕ありての後の事なるべきを。」(『鴎外全集』第18巻、昭和2年)

- 5) 本記事は明治31(1898)年8月11日から9月27日まで全29回にわたって連載された。当時の『建築雑誌』第142号には、本記事の内容を批評して住宅改良方針を早急に提示することを建築学会に要望した準会員からの投稿文が見られる。
- 6) 新聞『時事新報』明治期前期第17巻(9)、明治31年9月、1994年復刻版、p. 167
- 7) 同上、p. 167
- 8) 同上、p. 167
- 9) 同上、p. 167
- 10) 例えば、明治20年代の家政教育分野では、住宅の平面計画を「便利」という生活面でも重視するようになったことを前稿(参考文献 2))で指摘したが、そのほかにも、家事労働を蔑視しないことや、時間を節約することを説いたり、国家安泰の基礎として家庭の幸福や快楽を目指すことを説いたり、さらに、理想の家庭として家族の団楽や和楽に満ちた「ホーム」を目指すべきことを説いたりしていた。
- 11) 雑誌『太陽』第5巻第26号、明治32年12月、p. 155
- 12) 雑誌『太陽』第5巻第7号、明治32年3月、p. 162
- 13) 同上、p. 163
- 14) 井上繁次郎：通俗・家屋改良建築法、明治35年、p. 17～18
- 15) 同上、p. 18
- 16) これは参考文献 2) で取り上げた家政教育文献である。
- 17) 同上、p. 18～19
- 18) 村井寛(弦斎)：実地経験・台所重宝記、明治38年、p. 357～358
- 19) 山方香峰：日常生活衣食住、明治40年6月、p. 76
- 20) 横手千代之助：最も快い住居と夜具蒲団、雑誌『婦人画報』第70号、明治45年6月、p. 46
- 21) 斎藤兵次郎：日本家屋構造、中巻、明治37年、p. 4
- 22) 三宅秀：家事衛生、女学叢書第2巻、明治34年、p. 132
- 23) 石原喜久太郎：新編家庭衛生、明治41年、p. 70
- 24) 星常子・中島与志子：家事教程、上巻、明治35年、p. 131～132
- 25) 同上、p. 138
- 26) 同上、p. 142
- 27) 同上、p. 142
- 28) 甫守ふみ：実用家事教科書、上の巻、明治41年、p. 145
- 29) 戸野みちえ：最新家事教科書、上巻、明治40年、p. 94
- 30) 同上、p. 95
- 31) 小栗要逸・他：実用家庭百科全書、明治42年、p. 59
- 32) 同上、p. 58～59
- 33) 百束持中：家庭読本・家作の栞、明治41年、p. 13
- 34) 同上、p. 9～10

(1995年10月10日原稿受理、1995年12月14日採用決定)